

(8) モモ

〔果樹類>落葉果樹>核果類>もも類>もも〕

① 防除のポイント・注意事項

病害虫名	防除時期	摘 要
【 全 般 】	[耕 種 的 防 除]	・果実の病害虫被害を予防・軽減するためには、袋かけ栽培が望ましい。
黒 星 病	開 花 期 ～ 袋 か け 前	・多くの病気は花感染が原因であり、満開期防除を行うとともに、その後は袋かけまで定期的な防除に努める。 ・袋かけは、生理落果が終わったのこと確認し、満開60日後を目安に実施する。
縮 葉 病	開 花 直 前	・発病後に治療する方法はないので、必ず3月の発芽前に石灰硫黄合剤を散布する。 ・ <u>休眠期防除参照</u>
	9 ～ 1 0 月	・縮葉病の越冬菌は、樹皮に付着して冬期間は増殖しないことから、この時期にボルドー剤を散布すれば、翌年の発芽前防除に代えることができる。
せん孔細菌病	【 共 通 】	・ <u>欄外参照</u>
	果 実 肥 大 期	・暴風雨が発生した場合は、速やかに抗生物質薬剤を単剤で散布する。
	生 育 期 (9 月 以 降)	・早期落葉や夏型枝病斑の発生が見られる場合の対策は、 <u>欄外参照</u> 。
	[耕 種 的 防 除]	・冬季せん定で罹病した枝は、切除して園外で焼却または埋設処分する。 ・栽培期間中も、罹病した枝も随時、同様に処分する。
灰 星 病	開 花 直 後 ～ 成 熟 期	・収穫直前の成熟果に発生するが、収穫時に健全に見えても貯蔵中に急激に発病することも珍しくない。 ・発病果実を見つけたら、園外に持ち出して土中などで処分する。また、発病果実に触れた手で、他の果実に触れないように注意する。
	[耕 種 的 防 除]	・発病果や枯れ枝は、有力な伝染源なので除去に努める。 ・摘果後は、すみやかに袋かけを行う。
ホモブシス腐敗病	成 熟 期	・灰星病とともに果実腐敗を起こす代表的な病害である。灰星病と同様に、樹上果実や収穫後果実にも、急激に発病する。 ・晩生ほど感染期間が長く、発生が多くなりやすい。
	[耕 種 的 防 除]	・枯れ枝は、有力な伝染源なので、せん定で取り除く。 ・摘果後は、すみやかに袋かけを行う。
切り口および傷口のゆ合促進	剪定整枝時・病患部削り取り直後・及び病枝切除後	・切り口に、適量のトップジンMペーストを塗布する。
うどんこ病	果 実 肥 大 期	・病原菌は、被害果実、被害落葉で越冬し、果実は5月～6月にかけて発病する。
果実赤点病	果 実 肥 大 期 (6 月 ～ 7 月)	・ウメシロカイガラムシの加害症状と酷似するが、吸汁痕の有無で識別する。
すすかび病	果 実 肥 大 期 (5 月 ～ 6 月)	・風通しの悪い園や袋掛けが遅れた園、冷夏・長雨が連続と発生が多い。 ・5月上旬から袋掛け前までに数回、幼果に薬剤が付着するようにいねいに散布する。
	[耕 種 的 防 除]	・収穫時期が遅くなると、発病が多くなるので、適期収穫を心がける。 ・冬季せん定で罹病した枝は、切除して園外で焼却または埋設処分する。 ・果実への感染を防ぐため、袋かけを行う。また、密植を避けて、風通しをよくする。

病虫害名	防除時期	摘 要
黒 斑 病	落 下 後 ～ 生 育 期	<ul style="list-style-type: none"> この病気は、「清水白桃」に特異的に発生が多く、多発すると大きな被害を生じる。 風通しの悪い園や5月～梅雨期及び9月に気温が高く降雨が多いと発生が多い。 落花後から幼果の肥大期までの散布が重要である。
	[耕 種 的 防 除]	<ul style="list-style-type: none"> 「清水白桃」以外の品種へ、転換する。 発病樹は伐採し、発病果、発病枝は見つけしだい処分する。 密植、過繁茂、多窒素栽培を避ける。
白 紋 羽 病	植 付 時	<ul style="list-style-type: none"> 植え付け前に、根部を10分間、殺菌剤で浸漬後植え付ける。
	[耕 種 的 防 除]	<ul style="list-style-type: none"> 着果過多を避ける。
炭 疽 病	果 実 肥 大 期	<ul style="list-style-type: none"> 4～6月の果実肥大期に降雨が多いと発病が多く、樹勢の劣る樹では発病が助長される。
	[耕 種 的 防 除]	<ul style="list-style-type: none"> 発病しにくい「白桃」、「大久保」などの品種を植え付ける。
胴 枯 病	[耕 種 的 防 除]	<ul style="list-style-type: none"> 凍害、着果過多、樹勢の低下、強せん定、排水不良等によって発生が助長される。 胴枯病菌は凍害による傷だけでなく、様々な傷から感染するため、樹体の保護に努める。 せん定後は、切り口を速やかに癒合剤で塗布し、傷口を保護する。
アブラムシ類	展 葉 期 ～ 新 梢 伸 長 期	<ul style="list-style-type: none"> モモでは主にモモアカアブラムシ、モモコフキアブラムシ、ウメコブアブラムシが加害し、常に軟らかな新葉部分から吸汁し、葉巻き症状を引き起こす。 モモの葉が硬化する5月下旬以降は別の植物へ移動し、10～11月にモモ樹に戻ってきて産卵し越冬する。
カメムシ類	果 実 肥 大 期	<ul style="list-style-type: none"> モモでは主にチャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシが加害する。 冬季は落葉下で越冬し、年に1～3回発生する。 発生予察情報に注意するとともに、自園での発生状況の把握に努める。発生が見られたら、早期に薬剤を散布する。
モモハモグリガ	果 実 肥 大 期	<ul style="list-style-type: none"> 幼虫が大きくなると効果が低下するため、早期発見して薬剤を散布する。
シンクイムシ類 (モモシンクイガ、モモノゴマダラノメイガ、ナシヒメシンクイ)	果 実 肥 大 期 ～ 成 熟 期	<ul style="list-style-type: none"> モモシンクイガは、土中繭内にて幼虫の形態で越冬し、4～5月になると冬繭から脱出して蛹になり、6～8月に成虫となる。成虫は果実表面に産卵し、ふ化幼虫は果皮を食い破って果肉に侵入し、果実内を縦横に食害する。老熟後は果面に1～2mmの穴をあけて脱出し、地表面近くで夏繭をつくる。 モモノゴマダラノメイガは、果実のみを加害し、有袋果であっても袋の裂け目から侵入する。 ナシヒメシンクイの越冬世代成虫は4月下旬から発生し、新梢先端部に産卵、新梢内を食害して心折れ被害となる。6月下旬以降に産卵、ふ化した幼虫は果実に移動して食入する。 果実の中まで薬剤の効果は届かないので、果実への食入前に薬剤を散布する。
カイガラムシ類	休 眠 期	<ul style="list-style-type: none"> 休眠期防除参照
	生 育 期	<ul style="list-style-type: none"> モモを加害するカイガラムシは、ウメシロカイガラムシ、タマカタカイガラムシが主な種類である。いずれの種類とも、ふ化から1～2週間でカイガラを形成し、薬剤の効果が著しく低下するので、薬剤散布はふ化直後に実施する。 5-1ウメ(4)カイガラムシ類の防除参照

病害虫名	防除時期	摘 要
コスカシバ	休眠期 (落葉後～ 萌芽前)	・幼虫は樹皮下で越冬し、翌春も食害を続け、樹皮下で蛹化する。越冬幼虫の発育は不揃いで、成虫になる時期も揃わないため、成虫の発生期間は5～10月と幅がある。 ・あらかじめ虫糞を取り除き、樹幹部および主枝に十分散布する。 ・新芽の葉害を避けるため、萌芽前に散布を終える。
	幼虫発生期	・薬剤は、虫糞が見られるところを中心に、主幹部全体に散布する。 ・生物農薬は、効果を高めるために、晴天時の散布は避け、曇天または少雨時に散布するのが望ましい。
	成虫発生初期から 終期 (5月上～中旬)	・性フェロモン剤を枝に巻き付け、園内で片寄りのないように設置する。 ・効果を高めるために、広範囲一斉設置と併せて防風垣や防風ネットを設置する。 ・効果は1シーズン限りなので、毎年付け替える。
ハダニ類	生育期	・梅雨明け後～盛夏期に、無降雨が続くと発生しやすい。 ・高温乾燥期には園内での発生状況に注意し、必ず発生初期に防除する。 ・収穫間際や収穫期に発生することがあり、その際には薬剤ごとの収穫前日数に十分注意する。
モモサビダニ	生育期	・葉の表面全体の葉緑素が抜けて銀白色に輝いて見え、短時間で樹全体に拡大するため、早期発見に努め発生初期に防除する。
ハマキムシ類	生育期	・中齢以上の幼虫になると巻いた葉の中で生存するため、葉裏に寄生している若齢期に防除することが効果的である。
ドウガネ ブイブイ	果実肥大期	・薬剤散布により成虫の忌避効果が高い薬剤を使用する。
モモチョッキリ ゾウムシ	落花後	・成虫の捕殺に努める。
	[耕種的防除]	・発病して落下した果実や枯れ枝は有力な伝染源になるため、園外に持ち出し、焼却または処分するか、土中に深く埋める。

② せん孔細菌病の防除

本病は、果実に病斑を作り商品価値を低下させるだけでなく、早期落葉を引き起こし、果実肥大や糖度が低下する原因になる。周年的な対策が必要なので、次の各項目により総合的な対策を行う。

・防風垣、防風ネットの設置

風雨によってできた植物体表面の微細な傷口が病原菌の侵入口となるので、樹園地の周囲に防風垣や防風ネットを整備して、風当たりを和らげることが薬剤散布以前に重要である。また、新たにモモを植栽する場合は、風当たりの強い場所を避ける。

・ボルドー剤の散布

開花直前のボルドー剤散布によって、せん孔細菌病の越冬菌密度の低下をはかる。

・薬剤のローテーション散布と微生物殺菌剤の利用

薬剤耐性菌の発生を防止するため、異なる系統の薬剤を交互に使用するよう努める。また、化学農薬とは異なる作用機構である微生物殺菌剤により効果的に細菌病害の発生を抑えるため、袋かけまでは防除の際に微生物殺菌剤を混用する。

・果実の袋かけ

5月以降、葉に病斑が見られる園地では、果実の袋かけを行う。袋かけ直前に本冊子に記載した薬剤を散布し、病原菌の果実袋内への包み込みを防止する。

・夏型枝病斑への対応

夏場になって新梢に発生する「夏型枝病斑(サマーキャンカー)」は二次伝染源になるので、見つけ次第切除して、園外へ持ち出して処分する。

・抗生物質薬剤の散布

暴風雨や降雹があった場合には、天候回復後すみやかに抗生物質薬剤を散布する。また、生育期には定期的に薬剤を散布して、発生抑制をはかる。

モモ【殺菌剤】

RPA

作物名	薬剤名	農薬の種類	RAC	毒劇	使用時期	使用回数	使用量	使用方法	適用病害虫名/使用濃度（希釈倍率）												
									うどんこ病	すすかび病	せん孔細菌病	ホトブシ腐敗病	果実赤点病	灰星病	黒斑病	黒星病	縮葉病	縮葉病（休眠期）	切り口及び傷口のゆ合促進	白紋羽病	炭疽病
もも	ICボルドー-412	銅水和剤	M1		-	-	200～700g/10a	散布			30～50倍						30倍				
もも	イウワロアブル	水和硫黄剤	"UN(*)		発病前～発病初期	-	200～700g/10a	散布									500倍				
もも	ホルフィンラスワロアブル	テブコナゾール・フルボキサム水和剤	"[-](I*),3		収穫前日まで	3回以内	200～700g/10a	散布	3000倍												
もも	サルファゾル	水和硫黄剤	"UN(*)		発病前～発病初期	-		散布									400～500倍				
もも	ジマンダイセン水和剤	マンゼブ水和剤	"UN(*)		収穫21日前まで	3回以内	200～700g/10a	散布		600倍		600倍					600倍				
もも	スコア顆粒水和剤	ジフェノコナゾール水和剤	3		収穫前日まで	3回以内	200～700g/10a	散布					2000倍				2000倍				
もも	スターナ水和剤	オキソリニック酸水和剤	31		収穫7日前まで	3回以内	200～700g/10a	散布			1000倍										
もも	ストロビートライワロアブル	クレスキシメチル水和剤	11		収穫前日まで	3回以内	200～700g/10a	散布					2000倍				2000倍		2000倍		
もも	チオノックワロアブル	チウラム水和剤	M3		収穫7日前まで	5回以内	200～700g/10a	散布			500倍		500倍			500倍	500倍				
もも	デランワロアブル	ジチアノン水和剤	M9	劇	収穫7日前まで	4回以内	200～700g/10a	散布			600～1000倍	600倍	600倍			600～1000倍	1000倍				
もも	トップジンM [®] -スト	チオファネートメチル [®] -スト剤	1		【A】	3回以内		塗布											原液		
もも	トップジンM水和剤	チオファネートメチル水和剤	1		収穫前日まで	6回以内	200～700g/10a	散布			1000～1500倍	1000～1500倍				1000～1500倍					
もも(苗木)	トップジンM水和剤	チオファネートメチル水和剤	1		植付前	1回	-	10分間根部浸漬												500倍	
もも	トリフミン水和剤	トリフルミゾール水和剤	3		収穫前日まで	3回以内	200～700g/10a	散布	1500～2000倍								1000～1500倍				

作物名	薬剤名	農薬の種類	RAC	毒劇	使用時期	使用回数	使用量	使用方法	適用病害虫名/使用濃度（希釈倍率）												
									うどんこ病	すすかび病	せん孔細菌病	柿アシ腐敗病	果実赤点病	灰星病	黒斑病	黒星病	縮葉病	縮葉病（休眠期）	切り口及び傷口のゆ合促進	白紋羽病	炭疽病
もも	トレンックス70アブル	チラム水和剤	M3		収穫7日前まで	5回以内	200～700g/10a	散布			500倍			500倍		500倍	500倍				
もも	ナリアWDG	ピラクトロビン・ボスカリド水和剤	11,7		収穫前日まで	2回以内	200～700g/10a	散布				2000倍		2000倍		2000倍					2000倍
もも	バリタシン液剤5	バリタマイシン液剤	U18		収穫7日前まで	4回以内	200～700g/10a	散布			500倍										
もも	フルツセイバ-	ベンチオピラド水和剤	7		収穫前日まで	3回以内	200～700g/10a	散布						1500～2000倍		1500～2000倍					
もも	ベルコート70アブル	イミダクジナルベシ酸塩水和剤	M7		収穫前日まで	3回以内	200～700g/10a	散布				1000～2000倍		1000～2000倍		1000～2000倍					
もも	マイコシールド	オキシテトラサイクリン水和剤	41		収穫21日前まで	5回以内	200～700g/10a	散布			1500～3000倍										
もも	マスタビース水和剤	シュートモスロシア水和剤	「-(生)」		収穫前日まで	-	200～700g/10a	散布			1000～2000倍										
もも	ムッシュボールド-DF	銅水和剤	M1		開花前まで	-	200～700g/10a	散布			500倍					500倍					
もも	ロブラル水和剤	イプロン水和剤	2		収穫前日まで	3回以内	200～700g/10a	散布				1000倍		1000～1500倍							

使用時期：【A】 剪定整枝時、病患部削り取り直後、及び病枝切除後

作物名	薬剤名	農薬の種類	RAC	毒劇	使用時期	使用回数	使用量	使用方法	適用病害虫名/使用濃度（希釈倍率）													
									アブラムシ類	ウメシロカイガラムシ	カイガラムシ類	カイガラムシ類幼虫	カラムシ類	コスカシバ	シクイムシ類	ナシヒメシクイ	ハダニ類	ハマキムシ類	モモザビダニ	モモシクイガ	モモハモグリガ	
もも	フェニックスフロアブル	フルベンジアミド水和剤	28		開花期まで	1回	5～200% /10a	【Z】							200～500倍							
					収穫前日まで	2回以内	200～700% /10a	散布							4000倍	4000倍						
もも	マイトコーネフロアブル	ビフェナゼート水和剤	20D		収穫前日まで	1回	200～700% /10a	散布										1000～1500倍				
もも	マブリック水和剤20	フルベリネート水和剤	3A	劇	収穫21日前まで	2回以内	200～700% /10a	散布	2000～4000倍						2000倍		2000倍					2000倍
もも	マラソン乳剤	マラソン乳剤	1B		収穫7日前まで	5回以内	200～700% /10a	散布	1000～3000倍		1000～2000倍					1000～2000倍	1000～3000倍				1000倍	
もも	モスビラン顆粒水溶剤	アセタミプリド水溶剤	4A	劇	収穫前日まで	3回以内	200～700% /10a	散布	2000～4000倍		2000倍		2000～4000倍	2000倍	2000～4000倍							2000～4000倍
もも	モベントフロアブル	スピロテトラマト水和剤	23		収穫7日前まで	3回以内	200～700% /10a	散布	2000倍		2000倍							2000倍				
もも	ロゼイ乳剤	フェンプロパトリン乳剤	3A	劇	収穫前日まで	5回以内	200～700% /10a	散布	1000～2000倍				1000～2000倍		1000～2000倍							1000～2000倍
果樹類	ハイオセーフ	スタイナーネマカーボカブサイ剤	「 (生) 」		幼虫発生期	-	25% /10a	【Y】							2500万頭 (約10g)							
果樹類	スカンコンL	シナンセロ剤	- (7E)		【B】		40～100本 /10a	【X】							8g/100本 製剤							

使用時期：【A】休眠期(落葉後～萌芽前)、【B】成虫発生初期から終期

使用方法：【Z】樹幹部及び主枝に散布

【Y】虫糞が見られる所を中心に主幹部全体に散布

【X】ディスプレイを対象作物の枝に巻き付け設置